日本スポーツ社会学会だより

第9号
1994.10.15

発行
日本スポーツ社会学会事務局
〒305　つくば市天王台
筑波大学ｽﾎﾟｰﾂ社会学研究室内
Tel.& Fax: 0298-53-6371(佐伯)
Tel.& Fax: 0298-53-6378(松村)
郵便振替口座　日本ｽﾎﾟｰﾂ社会学会事務局
00390-0-43962

Ⅰ　諸報告
1　第Ⅱ期第3回理事会報告
2　学会誌編集委員会から
Ⅱ　研究通信
1　寄生者(ﾊﾟﾗｼﾞｯﾄ)としてのモータースポーツ　…遠藤竜馬（大阪大学）
－差異理論的視点から－
2　大リーガーは欲張り　…阿部晃士（東北大学大学院）
3　仙台からのスポーツ発信　…丸山富雄（仙台大学）
Ⅲ　スポーツ報道の現場から
アメリカ大陸横断４７００ｷﾛを６４日間で走る！！…下条由紀子（ランナーズ）
Ⅳ　「スポーツ社会学」事始め
「スポーツの社会的機能」研究を振り返って　…藤原健固（中京大学）
Ⅴ　書評
1　『高校野球の社会学』と研究者の身体　…清水　諭（筑波大学）
2　原田達著『マラソンの現象学』に学ぶ　…甲斐健人（筑波大学大学院）
－スポーツと社会への「対抗」－
Ⅵ　フィールド・ワーク
1　中国農村調査事始め　…中島信博（東北大学）
2　伝統遊びは消失するのか　…佐川哲也（金沢大学）
Ⅶ　異文化で考える
1　英国スポーツ文化の渦の中で　…坂上康博（福島大学）
2　日本で異文化を教える　…夫　基源（茨城大学）
Ⅷ　海外学会だより
Report from XⅢth World Congress of Sociology　…清水　諭
Ⅸ　会員の異動
編集後記　…松村和則（筑波大学）

日本スポーツ社会学会第４回大会参加申込要領

期　日：平成７年３月２９日（水）　３０日（木）

日　程：２９日

11:00	1:00	2:00	5:00	6:30	8:00
理　事　会	受付	シンポジウム	総　会	懇 親 会	

シンポジウムのテーマは追ってお知らせします。

３０日

9:30	12:30	2:00	5:00
一　般　発　表	昼　食	一　般　発　表	

新理事会は２日目の昼食時に行います。

会　場：明海（めいかい）大学　浦安キャンパス
千葉県浦安市明海８　　℡ 0473-55-5111

申　込：発表・参加の有無にかかわらず大会参加申込用紙に記入の上、１１月２０日までに下記までお送りください（当日消印有効。大会時にも受付けますが、準備の都合上、是非上記期間内にお申し込みください）。

申込先：263 千葉市稲毛区弥生町 1-33　千葉大学教育学部　今村浩明　　043-290-2622

原　稿：プログラム用原稿はＢ５判縦置きで40桁×40行とし、２枚を限度とします。
マージンは上下左右とも各２センチ以上取ってください。
１行目にはタイトル、発表者氏名（所属）を書き（共同研究者が多い場合には２～３行目でも可ですが、その場合には発表者の名前の前に○をつけてください）、更に１行あけて本文を書きます。
原稿は、保護のため台紙を添え、Ｂ５判角封筒に入れてお送りください。
原稿の締切は１月２０日（当日消印有効）です。
プログラムは参加者（発表者を含む）に２月下旬に送ります。

交　通：○東京駅からＪＲ京葉線（八重洲南口方面地下ホーム）快速及び普通（青色電車）または同ホームＪＲ武蔵野線（オレンジ色電車）約２０分新浦安駅下車、徒歩１０分（駅前よりバス「マリナイースト２１行き」で明海大学前下車ならば３分）。
○地下鉄東西線利用の場合は浦安駅下車　２、３、６番バス停で、３番「マリナイースト２１行き」１５分　明海大学前下車

費　用：大会参加費３０００円（当日受付３５００円）　懇親会費３５００円（懇親会参加者のみ、大学院修士までは３０００円）　当日会場受付でお支払いください。

情報交換：当日、情報交換の意味で会員の著書、論文などの販売、配布、交換などのコーナーを設けます。今からご準備ください。書籍の場合は現物を明海大学矢島ますみ会員宛、来年３月１日以降２０日までに「学会用図書」と明記の上、適当冊数を郵送してください。残部は大会本部から著者または出版社へ返送しますが、郵送費は後日著者にご負担戴くかもしれません。

宿　泊：近くには下記などのホテルがあります。各自でお申し込みください（春休みのため、早めのお申込みをおすすめします）。

○ホテルバンガード浦安　浦安市今川 1-1-40　　0473-54-5123
ツイン１９５７０円　和室（３名）２７８１０円　和室（４名）２３６９０円
最寄駅　ＪＲ新浦安駅より徒歩５分
会場までの交通　徒歩１５分　または新浦安駅よりバス３分

○浦安ステーションホテル　浦安市北栄 1-12-33　　0473-50-5050
シングル　７９３１円＋消費税ほか　ツイン　１３５９６円　１０月より受付

最寄駅　地下鉄東西線浦安駅より徒歩１分
会場までの交通　浦安駅より新浦安駅までバス１０分

○ニューシテイホテル浦安　市北栄 3-27-1　　0473-54-5411
最寄駅　地下鉄東西線浦安駅より徒歩５分
会場までの交通　浦安駅より新浦安駅までバス１０分
シングル　７０００円＋消費税ほか　３ヶ月前予約開始
ツイン　１２０００円＋消費税ほか　３ヶ月前予約開始

○サンルートプラザ東京　浦安市舞浜 1-6　　0473-55-1111
ツイン　２２０００円＋消費税ほか
最寄駅　ＪＲ舞浜駅（新浦安から一つ東京寄り）より無料バス３分
会場までの交通　舞浜駅－１分－新浦安駅

明海大学は大学のスポーツ施設を有料で恒常的に市民に公開し指導もしているユニークな大学です。

また蛇足ながら、近くには東京デイズニーランド、幕張メッセ、葛西臨海公園（マグロの回遊が見られることで全国的に有名な水族館あり）など見所もあります。お帰りの途中、浅草界隈を散策されるのも一興かと存じます。多くの方々のご参加をお待ちしています。

---------- キリトリ ----------

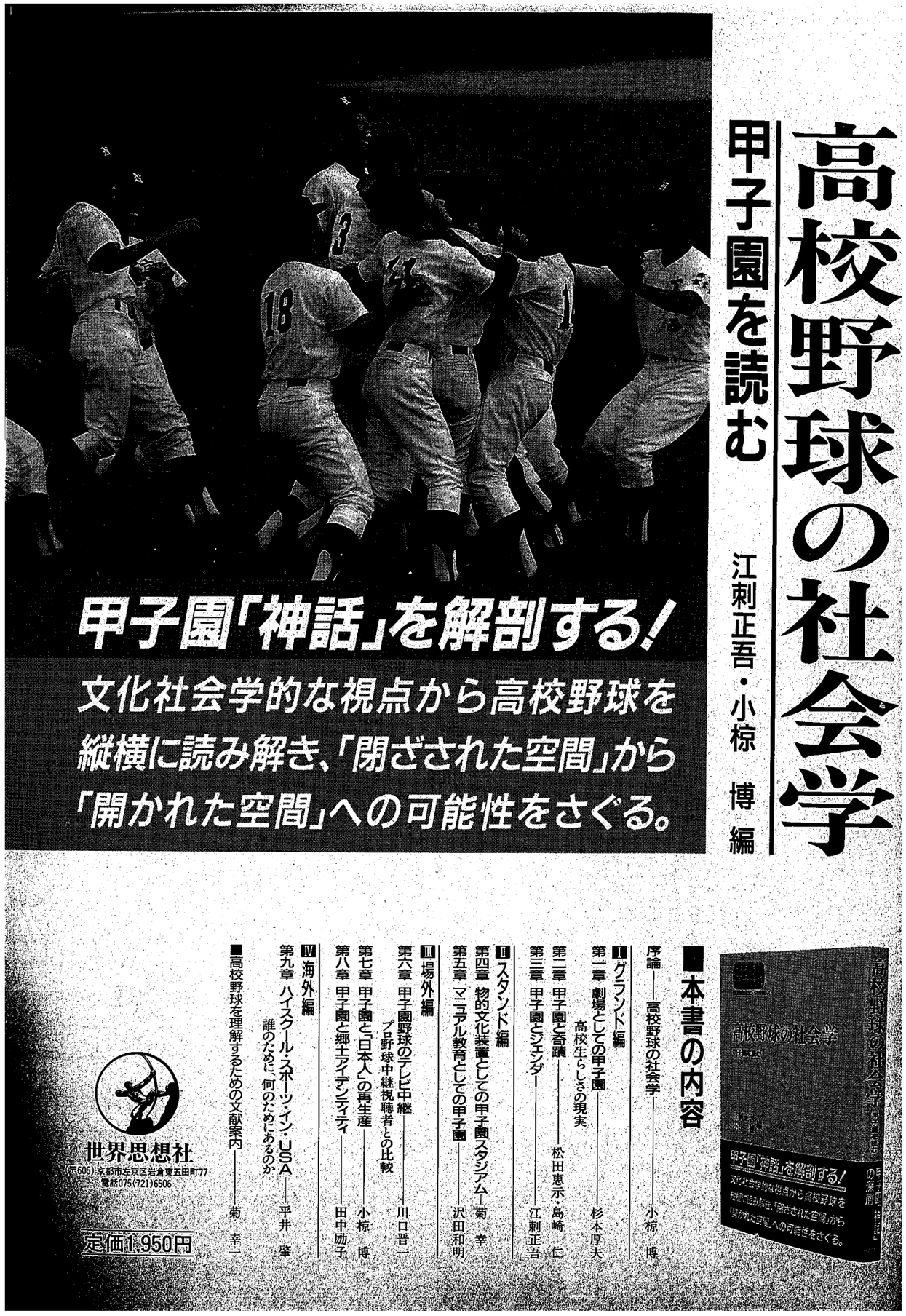
日本スポーツ社会学会第４回大会参加申込用紙

（　　）内はどちらかに○をつけてください。

大会参加の有無	（参加する　　参加しない）	
懇親会参加の有無	（参加する　　参加しない）	
発表の有無	（発表する　　発表しない）	
発表者（登壇者のみ記入	テーマ（予定）	
	ＯＨＰ	（使用する　　使用しない）
	スライド	（使用する　　使用しない）
	ビデオ（ＶＨＳのみ）　（使用する　　使用しない）	
情報交換	（参加する　参加しない）　物件（該当するものに○） 書籍（売価　　）、論文、その他（　　）（売価　　）	

氏　名 ＿＿＿＿＿＿　所　属 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

大会本部からの連絡先　〒＿＿＿＿　住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿



日本スポーツ社会学会（第Ⅱ期理事会）
第３回理事会（１０月６日・東京）会議録

参加理事：井上会長、池井、今村、江刺、亀山、小椋、佐伯、松村、森川、山口。

1　役員選挙について（佐伯理事）
選挙管理委員　　：田崎会員（筑波大学）・加納会員（武蔵丘短大）
立会人（事務局）：松村会員（筑波大学）
日程：　　平成７年１月中旬に投票用紙、選挙人名簿など発送
投票締め切り：平成７年１月３１日（消印有効）　開票（２月７日を予定）
３月の理事会に結果を報告、総会提案を決定。新会長決定・新理事会を召集。

2　第Ⅲ期執行体制（研究誌編集・事務局）について（佐伯理事）
事務局（筑波大学）、機関誌編集（奈良女子大学）の担当を交代することに決定。

3　第４回　学会大会（今村理事）
下記修正の後、別項要項の通り
シンポジュームテーマ：亀山理事を中心として、文化装置としてのスポーツ、メタファーとしてのスポーツ（仮題）といったテーマが提案され、演者を含めてさらに研究担当理事、実行委員会で検討する。
特別講演：予算処置がとれれば外国人の招待講演を考える。シンポの前後に入れる。
プログラム：総会を３０分繰延べる。
学会の要項は「学会だより」に同封する。出席依頼状をつける。
学会中に別刷り、著書コーナーを設置する。

4　委員会報告
・編集（江刺理事）：第３巻　投稿論文８、研究ノート１を査読にまわした。小特集「消費社会とスポーツ」を組むことを検討中である。書評「エリアス・ダニング論」を池井、菊会員に依頼中。研究業績リストの作成。到着の遅れた１編について検討。
・研究（今村理事）：学会の持ち方（連続テーマを含む）の素案を検討し、研究実績にたった学会としての科研費申請を検討中。
・渉外（山口・佐伯理事）：ICSS（国際スポーツ社会学会）、アジアスポーツ科学会議の報告、NASSS（北米スポーツ社会学会）、国際比較スポーツ学会、ユニバーシアード会議、科学会議、国際スポーツ哲学・文化会議などの案内。ICSSの名称変更など。
・会計（森川理事）：会費の自動引き落としを総会に提案。学会大会への補助を予算化する（５万円を予定）。

5　事務局関係（松村理事）
会員状況：２４７名（昨年２３２名）、会費納入者１３９名。（９／９現在）
滞納者については、理事全員が積極的に納入を促す。
「たより」発行：６月、１０月（現在編集中）、２月末　印刷は前田印刷と契約済み。
役員内規の改正：理事定員の削減に関して。会員が２００名を超えた場合３０名に１名とすることを総会に提案する。

6　第５回　学会大会候補地
宮城教育大（近藤会員）

7　その他
新執行部体制（理事会組織、研究誌編集など）は、継続性を考慮する。

（文責：佐伯・松村）

「スポーツ社会学研究」編集委員会からのお願い

会員間の研究上の情報交換と研究活動の活性化などを目的にして、前巻と同様、「スポーツ社会学研究」第３巻にも会員の研究業績リストを掲載する予定です。

以下の諸点を考慮されまして、積極的にご自分の研究業績を申告下さい。

①内容がスポーツ現象の社会的側面について検討していること。
②1990年以降に公表された印刷物であること。
③会員は、「スポーツ社会学研究」第１巻の105項から109項に掲載されている書式に従って研究業績を申告すること。
④会員は、自分の研究業績を「著書・編著」、「翻訳」、「論文」及び「報告書」の4部門に大きく分類し、さらに論文については、以下の「10の部門」に細分化して申告すること。
{1} 理論・学説・思想　{2} 研究方法　{3} パーソナリティ・社会心理
{4} 文化　{5} 集団・組織　{6} 教育　{7} 政治・経済・労働
{8} 社会変動・歴史　{9} 社会問題・社会計画　{10} その他

特に、③の書式は厳守して下さい。

提出期限は、編集作業の都合上１９９４年１１月１５日とします。
提出先は、〒630　奈良市北魚屋東町　奈良女子大学文学部　江刺正吾　宛にお願いします。

Ⅱ　研究通信

「寄生者(ﾊﾟﾗｼﾞｯﾄ)としてのモータースポーツ～差異理論的視点から～」

遠藤竜馬（大阪大学・人間科学部）

モータースポーツは、スキャンダラスな存在である。

まず何より、それを「スポーツ」というカテゴリーに含めること自体が疑わしい。スポーツが、「知的および肉体的技術が重要な位置を占める競技」（グートマン）と定義されるとするなら、モータースポーツの「スポーツ性」は、決して万人にとって自明な事柄ではない。

例えば、モータースポーツの魅力は何かという問いに対して、「スピード（感）とスリル」という表現が頻繁に用いられる。仮に、あなたがスポーツカー（とはいうものの、それはそもそもどういうクルマを指すのだろうか？）に乗って、高速道路を200キロで飛ばしているとしよう。あなたは、かの「スピードとスリル」を存分に味わっている。だが、この行為のいったいどこが、知性や身体的技能を要求するというのだろうか？

また、この問題は、モータースポーツの社会的なイメージや評価とも深い関連をもっている。「スピードとスリル」は、道路交通の文脈で語られるや、直ちに否定的な意味あいを帯びてしまう。少なくとも、「スポーティな」運転を公道上で実践することは――その「スポーツ性」をいかに定義しようと――道交法を厳密に受け取るかぎり、「暴走」や「危険行為」とみなされざるをえないだろう。

モータースポーツというとき、狭義には、ＦＩＡ＝国際自動車連盟や各国の所轄組織（日本ではＪＡＦ＝日本自動車連盟）が公認し、サーキットなどのクローズドコースで行われる競技だけが、これに該当する。とりわけ我が国の場合、人々の意識の内における、公式モータースポーツと一般道での「暴走」との混同やイメージ的重なりを解消するための関係者の努力が、モータースポーツ界の歴史にとって、きわめて大きな部分をなしてきたといってよい。

その努力が花咲いたのが、昨今のＦ１ブームだった――バブルの崩壊とセナの死によって、「ブーム」としての側面はもはや終わった感があるが――という見方もあるかもしれない。しかし、本当に、モータースポーツは日本人に浸透したといえるのだろうか？

◆

私事で恐縮だが、興味深い出来事があった。私が勤務している大阪大学の吹田キャンパスは、敷地面積が100万㎡もあり、空き地（野原？）として放置されている土地も多い。その中に、少々荒れてはいるが一応は舗装された、100メートル四方ほどの空き地があった。私はそこで時々、ジムカーナ（広場にパイロンを立てて設定されたコースを走る競技で、１～２速を使う小回りの繰り返しとなる）の練習をすることがあったのだが、ある日、通りがかった年配の職員の方に、「こんなところで暴走していいと思っているのか！」と注意されてしまった。

そのときは黙って引き下がったのだが、どうも釈然としない。その空き地は校舎からは離れているし、日暮れ時で周囲の人通りもまばらだった。まして、私が走っていたとき、空き地の中には誰もいなかった。「危険」な要素は何もないはずだ。もちろん、騒音の問題を指摘されたなら反論の余地はない。エンジン音も、タイヤのスキール音も、それなりに出ていた。しかし、その人は決して「うるさい」と言ったのではない。彼はあくまで、「長山泰久教授[1]もいらっしゃる人間科学部の者が、こんなことをして恥ずかしくないのか！」と言ったのだ。

実は、その後もう一度同じようなことがあり、それ以来、学内でジムカーナもどきをすることはやめた。しかし、やはりそのときも、先方の口から最初に出てきたのは、「暴走」という言葉だった。

私は別に、自分の行為を正当化しようと思って、このようなことを書いているわけではない（むしろ、お前のような奴がいるから公式のモータースポーツが誤解されるのだ、という声が聞こえてきそうだ）。ここで指摘したいのは、ジムカーナ的運転に対する非難が、例えば往来でテニスをしている者に、邪魔だからやめろと言うのとは性質が異なる、という点だ。

往来でテニスをする者を注意する人は、それがテニスという「スポーツ」であることを知っている。その上で、スポーツをするには場所が相応しくないことを指摘しているだけだ。しかし、私に対する非難は、場所の問題だけではなく、行為そのものにも向けられている。おそらく、私を注意した人たちは、私の行為がジムカーナという「スポーツ」であるとは思っていなかっただろう。それは単に、「安全運転」の反対概念としての「暴走」としてカテゴライズされていたのである。

◆

社会学的観察は、人々の日常的実践（例えばスポーツ）の中で用いられている様々な区別＝差異の機能を分析する。より正確にいうと、社会学は、ある区別（例えばフェアー／アンフェアー、あるいは精神／身体）を用いることによって見えるもの（例えば「レスペクタビリティ」）を明細化すると同時に、その区別を用いるがゆえに見えないもの（例えば「階級」秩序の再生産）を見ようとする（例えばイデオロギー批判というかたちで）。

ある区別によって排除されつつ、にもかかわらず当の区別の機能領域に深く貫入しているもの――それをルーマンは、ミシェル・セールにならって「寄生者(ﾊﾟﾗｼﾞｯﾄ)」と呼ぶ。この概念を援用することで、少なくとも日本のクルマ文化におけるモータースポーツの位置を、より容易に理解することができる。

「スピードとスリル」が、モータースポーツを形容する常套句だということは先に述べた。しかし、この同じ言葉が、一般道での暴走行為に対しても付与される。このことは、我々のクルマ文化が、極めて一元的な区別の「ヘゲモニー」の下にあることを示している。

この区別は、それを用いる者によって言葉遣いが多少変化する。道交法の文脈において

1）我が国における交通心理学の権威であり、交通安全教育にも多大な貢献がある。

は、合法（低速で安全）な運転／違法（ハイスピードで危険）な運転となるし、逆に、いわゆる暴走族から見れば、タコな（スピードとスリルのない）運転／イカした（スピードとスリルのある）運転、ということになるのだろう。だが、これらは結局のところ同一の区別を用いているにすぎない。相違があるとすれば、プラスの価値とマイナスの価値とが逆転していることだけだ。あえて皮相的に表現するならば、警察と暴走族は、認識論的な共犯関係にあるのだ。ついでに言うと、コーナーを攻めるなんてとんでもないと思いつつ密かにポルシェに憧れる普通のドライバーも、「スピードの快楽」を（肯定的にであれ否定的にであれ）説く知識人やジャーナリストも、この点に関しては同罪である。

この、単なる表面的な「スピード」に定位する主導差異（ライトディフェレンツ）に基づいているかぎり、モータースポーツの本質への概念的なアプローチは閉ざされている。それは、クルマ文化から排除されつつも包摂された「寄生者」なのだ。我々の社会は、モータースポーツについて適切に語る語彙(ｾﾞﾏﾝﾃｨｸ)を、未だ持ち合わせていないのである[2)]。

◆

そんなわけで、さしあたって我々は、それを「実践」する者たちを観察することによって、モータースポーツという対象に接近することになる。

ところで、サッカーについて語るとき、プロリーグに目を向けるだけでは話にならないのと同様、Ｆ１だけでもってモータースポーツを語ることはできない。また、ジムカーナやダートトライアルといった底辺のアマチュアイベントまでに視野を広げても、やはり不十分であることに変わりはない。なぜなら、それは依然として、ＦＩＡスポーツ法典の枠組――公式／非公式という、先の主導差異に同調する副次的な区別――の中にとどまっているにすぎないからだ。

モータースポーツにとって、本当の草の根――サッカーにおける「下町の路地でボールと戯れる少年たち」に相当するものは何か？　あるいは、16世紀の路上フットボールのようなヴァナキュラーな形態を色濃く保っているサブカルチャーはあるのだろうか？　私の考えでは、公式のモータースポーツマン（？）をはるかに上回る数の、違法・非公然の「走り屋」たちこそが、それに他ならない。

彼らは、自分たちは「暴走族」ではないとアピールする。彼らは、そのカテゴリーがヘゲモニックな区別の構成物であること、そして自分たちが、当の区別にとって「寄生者」ドロジストのハーヴェイ・サックスが言及している「ホットロッダー」同様、「革命的カテゴリー」なのである。

もちろん、現実問題として、峠道や埠頭を日夜「ローリング」する彼らの存在は、関係者にとって悩みの種だ。「そんなにスピードを出したいならサーキット場（！）に行け」という者もいる。しかし、こうした一見「正論」は、「寄生者」の心理を逆撫でする。なぜなら、そこに垣間見えるのは、人間（とりわけ若者）の悪しき本能であるスピードへの欲望を、隔離された「処理場」に廃棄するという発想――いうまでもなく、これもまた支配的区別の所産である――でしかないからだ。

彼らにいかに対処すべきかを提案することは、ここでの考察の範囲を超える。しかし、少なくとも指摘できるのは、モータースポーツの「エートス」を路上にフィードバックすること、モータースポーツを媒介として我々のクルマ文化を見直すことの可能性であろう。「寄生者」は、システムの反省(ﾘﾌﾚｸｼｮﾝ)の契機なのだ。

こんな主張は、荒唐無稽に聞こえるかもしれない。だが、環境問題や交通事故などを通じてモータリゼーションの来るべき破局が明白となった今だからこそ、こうした可能性を想像することは無意味ではない、と私は思う。

2）同じ事態を、私は先日の大会報告で、「言説空間の歪み」という表現でもって示した。また、スピードの呪縛を超えたモータースポーツのスポーツ性定義も試みたつもりである。

2　「大リーガーは欲張り？」

阿部晃士（日本学術振興会特別研究員・東北大学大学院）

サラリー・キャップ制（総収入に占める選手の年俸の比率に上限を定める制度）導入をめざしたオーナー側と8月12日からストライキに入った選手会側との交渉はまとまらず、1994年9月14日、今期の大リーグ公式戦の中止が決まった。1904年以来続いているワールド・シリーズ実施の可能性もなくなった。この背景にあるのは1976年にフリー・エージェント制度を導入してからの選手の年俸高騰だといわれている。平均１億円を超える年俸によってほとんどの球団が赤字に追いこまれ、28球団のうち26球団のオーナーがシーズンの中止に賛成したという。サラリー・キャップ制は既にＮＦＬやＮＢＡで導入されているらしいが、果たして、大リーガーは「欲張り」なのだろうか？

報酬分配の問題にたいするアプローチのひとつに、「分配公正（distributive justiec）研究」がある。分配公正研究では、公正さの評価がおこなわれるメカニズムをモデルとして定式化し、そこから人間行動や社会変動の説明をめざす。当初から数理モデルが利用されてきた分配公正研究とスポーツ研究との関係について考えてみたい。

出発点は、次の式だ。

$$Op／Ip = Oa／Ia$$

これは1960年代半ばの、アダムスの衡平理論における公正の定義である。Ｉを交換関係に投入したもの（インプット）、Ｏを交換から得たもの（アウトカム）とし、ｐで評価する本人をａで交換の相手を示す。このような「得たものと投入したものの比が互いに等しい」関係が成り立たなければ交換関係は不公正ということになり、その大きさに応じて緊張が引き起こされる。そして当事者は不公正の低減を動機づけられるというわけだ。この衡平理論にもとづいて、心理学者は数多くの実験研究をおこなってきた。ある作業状況を仮定し、被験者にどの程度の報酬が公正かを尋ねる。あるいは、報酬の違いがパフォーマンスに与える影響を検討する。そして、「均等な分配」「必要性に応じた分配」なども考慮にいれて各々の分配原理が公正と評価される状況を特定化するための知見が蓄積されてきた。

このように「局所的」な状況における「個人の評価」に焦点を絞っている限りは、数学の利用は公正の定義式のみであった。だがその後の、局所的な状況での報酬水準への期待と社会の一般的報酬水準との関係を説明したり、集団全体での報酬の分布とそれに対する成員の評価の分布とを結び付けたりといった試みには、数理社会学者が関与し、より複雑なモデルが利用されるようになった －　。

さて、スポーツ研究との関係に戻りたい。これまでにも、実証研究のなかにはスポーツを扱ったものがある。野球を例にとれば、衡平理論における報酬とパフォーマンスの関係についての命題を検討する事例として、フリー・エージェント制の導入をとりあげた研究がある。また、実験研究でも、スポーツの状況を設定したものが幾つかある。

ではなぜ、スポーツか。おそらく個人の貢献度がデータとして把握しやすく、記録を遡ることが可能というメリットがあるのだろう。また、実験をおこなうにも集団内での貢献度の差異の操作が容易であることもあるだろう。

しかし、スポーツに対して分配公正のアプローチをおこなう意義は、そういった便宜的なものだけではない（「好きだから」は、このさい除いておくとして）。報酬の分配そのものが、スポーツにおいて重要な問題であるということ。なぜ、大リーグのストライキは回避できなかったのか。ＮＦＬやＮＢＡで既に導入されている制度を、なぜ大リーガーは拒否しているのか。こうした問いに答えるためには、被分配者の意識をまず問題にする必要があるはずだ。

もちろん、課題は多い。スポーツごとのルールや背景の違いをモデルに組み込めるか。また、大リーガーもオーナー達も「分配の公正さ」だけを争点に交渉をおこなったのではないかも知れない。「手続きの公正さ」との関係はどうか。そしてもちろん、「公正さ」だけが唯一の評価軸ではない。他の軸との関連をどうみるか。これらは、数理モデルを用いて分配公正研究をおこなうえでの、チャレンジングな課題でもある。リアリティに、い

かにして迫っていこうか。

3 「仙台からのスポーツ発信－東北帝国大学教授中川善之助のスポーツ分析－」

丸山　富雄（仙台大学）

「地方の時代」といわれて久しい。スポーツにおいても、例えばＪリーグ『鹿島アントラーズ』に象徴されるような「地方からのスポーツ発信」、「地域とスポーツ」の成功例も数多く報告されている。今、本学会における宮城県（仙台）という地方のしめる役割もクローズアップされているような状況となっている。ご承知のとおり、本学会理事長の粂野豊先生は今年の４月より私ども仙台大学の教授として赴任され、この８月より学長に就任された。また、３，４０代の体育社会学出身の多くの会員の恩師、菅原禮先生も仙台にご健在である。さらに学会の重鎮、宮城教育大学の近藤義忠先生の存在や、江刺（奈良女子大）、根上（宮崎大）、松村（筑波大）先生ら仙台とゆかりの深い会員も全国に多い。このようなことから、宮城県あるいは仙台がこれからのスポーツ社会学会の中で果たすべき役割や責任の重さを痛感している。それとも関連するが（もっとも出版社の言い分であって、私はあまり意識はしていないが）、仙台から、日下、生沼両先生、及び東北のスポーツ社会学専攻の若手先生方と『現代生活とスポーツ――スポーツ社会学ノート――』と題する大学生向けの講義用テキストを発信した。機会があれば御笑覧戴きたい。

本題に入ろう。かつて菅原先生より、東北帝国大学法文科教授、中川善之助のスポーツ随筆『雪やけ陽やけ』（昭和15年，河出書房）という本を紹介された。最近そのコピーを何気なく読んでいて、改めて彼の卓見に驚いている。古い先生方や法律の専門家であればよくご存じのことと思うが、中川は大正12年東北帝国大学法文科法科の創設以来、東北大学で教鞭をとり、その後学習院大学教授、金沢大学学長を歴任、学士院会員にも選ばれた著名な民法学者で、戦後の民法改正法案の起草委員でもあった。また、彼はスポーツ、特にテニス（硬式）とスキーの熱心な愛好家でもあり、そのほかのスポーツにもかなり造詣が深かった。宮城県あるいは東北におけるテニスの導入・普及は彼の東北大学赴任以来といわれ、昭和７年東北庭球協会設立に尽力し会長になっている。

この随筆集のなかの、昭和８年放送となっている『競技における「社会」と「法律」』や昭和７年帝国大学新聞に連載された『野球史の或る見方』などの内容は、現在においてもスポーツに対する見方や分析視角として有効であり、むしろ新鮮な感じがする。

『競技における「社会」と「法律」』の中で、彼は、競技は少なくともその競技の行われている間は一個の「社会」を形成しており、規律を絶対に必要とすることから、「競技社会というものは、……大きな実社会と極めて類似した性質を示し……如何にも全体社会を縮図にしたような関係がある。」と述べている。大先輩の会員の方はいざ知らず、我々が親しんできたスポーツ社会学は、1960年代後半からの主にアメリカの文献が中心であった。それらの文献の中にも、スポーツは実社会の鏡であるとか、ミクロコスモであるという記述があったことを思い出すが、それより30年も昔にわが国の法律学者の正鵠を得た表現を発見した時、筆者の顔が思わずほころんでしまったことは皆様にも理解して戴けると思う。彼の論旨を要約しよう。

「スポーツはスピードをその要素とする。このようなスピーディな社会活動を規律する法律は内部的な意思を問題にせず、外部的な形式を重んずる特徴を持たざるを得ない。したがってスポーツのルールの多くは形式主義である。この形式主義は裁判官（審判）の職権主義と結合することによって一層効果的となり、さらに即決主義で異議を許さないとなると完璧となる。この形式主義、職権主義、即決主義を放棄することになれば、スピーディな社会活動を律することはできない。そこで拙くとも速い方がよいという拙速主義がやむを得ざる方法となってくる。スポーツはこの点を最も純粋な形で示した適例である。法律においても迅速な取引を規律する商法は程度の差こそあれ、スポーツルールと同一の方向をとる。特に手形取引の形式主義はその好例である。」

このスポーツルールの解釈、特徴づけには舌を巻くしかない。特にイギリス由来のスポーツにはこのことがよく当てはまり、永年ラグビーに親しみレフリーも経験してきた筆者には、この拙速主義が痛いほど分かる。

「法規の適用を司る司法という上からみても、法律における裁判と競技規則における審判とが著しい相似を示している。両者ともまず事実の認定があり、その事実に対し如何なる規律が適用されるべきかが断定される。この時、法規解釈の問題が必然的に含まれる。事実判断と法律判断とは法律上でも区別され、事実認定を争うことは控訴審までで打ち切られ、大審院への上告理由にはならない。しかし法規の解釈適用の問題になると最後まで争うことができる。スポーツでは多くの判断が事実判断であるが、野球規則ではルールの解釈適用に関する異議は主将に限りこれを提出することができ、これらのメカニズムは全く法律的である。」

漠然と、あるいは慣れ親しんできた社会学上の形式的なメルクマールをみて、スポーツは社会の縮図であるとしてきた我々にとって、この法社会学的な解釈は有益な示唆を与えるものではないだろうか。

いずれにしても、「社会活動の変遷が必然的に社会規律の変化を招来し、またそうして招来せられた規律の変化のみがよく社会活動を整頓し得ることにおいて、実社会における法律と競技における競技規則とは非常に興味ある類似性を示してくれる。」と指摘し、「規律によって社会は成立し、しかも社会に従ってのみ規律は規律たることを得るのである。」との結論は、近年の法律問題（例えば消費税や国民福祉税の導入）での世情の混乱や目まぐるしいルール改正によるスポーツ界の混乱をみれば首肯せざる得ない。

『野球史の或る見方』でもこのような視点から、大リーグの歴史を分析しているが、ここでは社会規範の「補填作用」という我々には馴染みのない概念から整理している。この「補填作用」とは、多くは一種の天才的人物の出現からであるが、社会活動が社会規範を逸脱するような結果をみせると、規範がこれに追随し、常に実際と規範との間の空隙を補填する傾向をもつことであるという。この問題は社会規範の学問にとって非常に重要であるが、その典型が模型的にスポーツにみられると指摘する。その例えとして、相撲の「張り手」を例に挙げているが、雷電為右衛門の出現まで人びとの頭には「張り手」ということは考えられなかった。彼の行為は相撲の社会規範の一歩先をいってしまったわけだが、競技の目的――あらゆる闘争的遊戯は闘争的感情を満足させつつ、闘争的禍害から安全であることをその本旨とする――から、初めは例外的に後には原則的に「張り手」が承認されるようになったと分析している。

大リーグの分析、時代区分においても、投手がはじめてカーブを投げたといわれる年から投手時代（中期）が始まり、ベーブルースの出現から打者時代（後期）が始まったとし、その後の社会規範の補填作用（ルールの変遷）を詳細に検討している。スポーツ技術や記録の向上がルールや参加規定というスポーツ規範をたえず揺り動かし、それを変更させてきたというテーゼは、我々の分野でももはや陳腐な問題となっているが、社会規範の補填作用ということで、60年も以前に実証的に検討されていたことは驚嘆に値する。是非、一読を勧めたい。

帝国大学新聞をみると、昭和８年頃から「スポーツ社会学」という名称を散見できる。本格的な研究は当然なされてはいなかったが、中川のような斬新な発想と分析があったことも事実である（中川の場合、スポーツ法学といったほうが適切か）。中川は他にもスポーツに関する論評をそこに投稿しており、まさに地方（仙台）からのスポーツ発信であった。

中川の夏の過ごし方は、朝早く研究室に行き、午前中は仕事をし、午後は中等野球のラジオ放送や昼寝で過ごし、４時すぎから毎日のようにテニスをしていたという。彼にとって、スポーツはその実践も理論的分析もあくまで余技でしかなかったろうが、現在自らほとんど運動もしない筆者にとって、彼のスポーツに対する行動力と分析力には羨望に似た感情をもたざるを得ない。それにしても、小泉信三にしろ彼にしろ、我々はスポーツ界にとっても素晴らしき大先輩をもっていたものである。

Ⅲ　スポーツ報道の現場にて

「アメリカ大陸横断４７００㌔を６４日間で走る！！」

下条由紀子（ランナーズ編集長）

今年の夏休みはホノルル、カナダ（ロッキー山麓）、ニューヨークと駆け足的にしかも、テーマに一貫性は無く（ただ、ヒコーキは東京ーニューヨーク往復を有効に使ってはいるが）過ごしてきた。前二者は完全なる休暇だったが、最後のニューヨークは仕事の要素が大分入っている。正確にはニューヨークではなく、その近郊に２日滞在、３日目にニューヨーク入りしたのである。

８月１７日夕刻、空路ニューワーク入りした私たちはその晩、空港近くのホテルで１泊、翌朝、レンタカーで地図とにらめっこしながら”彼ら”と遭遇するべく内陸に向かった。”彼ら”は正面からやってくるはずであった。道さえ間違えなければ、必ず出会える。

”彼ら”とは、６月１８日（土）、米西海岸、ロサンゼルス近郊のハンティントンビーチをスタートし、６４日間かけて４７００㌔のアメリカ大陸を走って横断する「トランスアメリカ・フットレース」に出場し、目前に迫ったゴールめざして、今日も走り続けている５人の勇者たちと、それを支えるサポーターの一行である。ゴールは３日後、２０日（土）のセントラルパーク（ニューヨーク、マンハッタンにある広大な市民憩いの公園）だ。

来た！　遙か前方に見えたトップを走るハンガリーのイスティバン選手の走姿がみるみるうちに迫ってくる。急いで車を脇に寄せ、拍手と声援を送る。手を上げて笑顔で応えるイスティバン。とても、すでに６２日間、毎日８０㌔平均を走ってきた人とは思えない。真っ黒に日焼けした身体と脂肪のかけらもない逞しい脚にこそ、その”偉業”は十分に感じられるのだが、疲れが見られないのである。思わず、「ウソーッ」が飛び出しそうになった。

さらに車を走らせると、すぐまた前方からもう一人やってきた。「佐藤さんですよね、がんばってください」というと、ちょっと意外そうな表情を見せたが、彼もまた、右手を上げるとペースを変えることなく走り去っていった。それはそうだろう。こんな所で全く見知らぬ日本人に自分の名前を呼ばれたのだから。第一、彼は１２年前に渡米していたのである。

つぎつぎ勇者たちと出会った私たちはサポートクルーとも合流し、この日のゴールであり、宿泊先でもあるハイスクールへ車を回した。（ちなみに、ハイスクールは夏休み中であったが、学校側の厚意でシャワー、トイレは使用自由。選手とクルーは持参のマットレスを敷いて床に寝る。６４日間、モーテルなどの専用有料宿泊施設を使用することはまれで、ほとんどがシャワー施設のある学校、リクリエーション施設、消防署などに泊まることもあるという。どこもないときは、教会が引き受けてくれるが、教会にはシャワーがないのでできるだけ避けたいのだといった。１日８０㌔も走るのだから、ゴール後の最初で最高の楽しみといえば当然、シャワーである）

今回３回目のこの「トランスアメリカ・フットレース」は日本のＮＨＫがほぼ全行程を取材、ムービーカメラに収めていた。１０月にＮＨＫスペシャルとして５０分番組で放映されるという。聞くところによると、ＮＨＫスペシャルの候補に申請される企画はなんと年間２０００本。うち採用されるのは２２本というから東大受験なみ（それ以上か。なにしろ受けたこともないのでわからないのです）の競走率である。アメリカ大陸４６００㌔を６４日間で人間の２本の脚で走って横断するというドラマは、企画として魅力たっぷりなことは確かだが、いざ取材となるとかなり、しんどいことには違いない。しかもそれを５０分という時間にまとめあげねばならないのだから。

先述したように、われわれもこの後、ゴールのセントラルパークまでの３日間を選手に同行取材したのだが、いくらこの大会の予備知識を十分に持っていようとも、全体がわかるはずもなかった。第一、ロサンゼルスをスタートした時、選手は１４人いたのである。それが５人になってしまっていた。それほどに過酷なレースにもかかわらず、われわれの前にいる選手たちは最初に感じたように疲れも見せず、実に明るく、優しいのである。６０日以上を走ってきたからこその笑顔だ。すべての行程がこうであったわけではない。

第４回大会は来年６月、今年と同じ日程、行程で開催される。来年はレースの”ヤマ”といわれる６日目ころからの１０日間、砂漠地帯、そして、今回同様のゴール間際と少なくとも２週間は追ってみたいと思っている。（ＮＨＫの番組は１０月１６日（日）午後９時から。興味のあるかたは、是非ご覧ください）

Ⅳ　「スポーツ社会学」事始め

「『スポーツの社会的機能』研究を振り返って」

藤原健固（中京大学・体育学部）

体育学部という異質の世界に入ったのは、２３年前のことである。それまで社会学、とりわけ、マスメディアを中心に何やら目に見えない抽象の世界で、理論めいたものを振り回していたように思う。

それが或る日、突然、中京大に来ないか、という話にのってしまった。というより、それは思ってもいない果実であった。社会学専攻生にとって、当時、おいそれと就職の話はなかったのだ。それは、今でも変わってないらしい。その時、既に３０歳。前年結婚し、後１、２年仕事が決まらなければ田舎に帰ろうと半分腹を括っていた。

話が決まり、２ヶ月後には、体育学部の教壇に立つということになった。大慌てでスポーツ社会学の本を読み、論文に目を通し、スポーツ界の大波小波に耳をそばだてた。そこで見たものは、スポーツは善くて美しく、スポーツマンに悪人はいない、ということだった。

これは感激だった。そんな世界で仕事が出来ることは夢のように思われた。しかし、この夢は必ずしも正夢ではなかった。

実際に、教壇に立って驚いた。私語はするし、堂々と両腕を机の上で組み、顔を埋めて自分の世界に陶酔する者も珍しくない。だいいち、本もノートも持って来ないモサに唖然としたものだ。

今では、この位のことでは驚かないが、当時は“こんな筈ではなかった”という思いは強かった。その思いは、やがて悩みとなった。この悩みを前にして、“ひとつ、これを考えてみよう”と思った。これが、スポーツの社会的機能の研究にのめり込む動機だった。まず、興味をもったのは、スポーツをすることで人間がつくられるかという問題である。この問題は愚問であるかに思えた。というのは、スポーツは善くて美しいもの、スポーツマンに悪人はいない、という捉え方が大勢であり、そのことに疑問をもつこと自体スポーツへの冒涜であるかに思われたのである。

しかし、現実はこの疑問を育てる具体的な現象に事欠かなかった。少なくとも、ルールを守る、ベストを尽くす、相手を尊重する、ティームワークを保つ、というスポーツマンシップの内容に違反する行為は、スポーツの場はいざ知らず、日常生活の場では目に余るものがあった。期待される社会的人間形成に及ぼすスポーツの機能とは、スポーツの場で身につけたスポーツマンシップの体得が日常生活の場でいとりの学生、社会人としての思考・行動様式に移行されるか否かという問題を指している。

実際にこの問題を考える手続きとして、スポーツの個人に及ぼす機能分析を調査結果に基づいて、分析・考察した。

①性格（personality）形成に及ぼす機能

②社会規範・価値（social norm and value）の形成・補強に及ぼす機能

③スポーツが期待される社会的人間形成に機能し得ているのであれば、社会移動（soci-

al mobility）に正機能（normal function）を果たしているに違いない。この仮説に基づく社会移動に及ぼすスポーツの機能。

未熟な研究結果を総括すれば、確かに、スポーツによる社会化（socialzation through physical movement）機能は認められるということである。しかし、それ　は逆機能（dys-function）よりも正機能の側面が若干多いというに過ぎない。また、スポーツによる逆機能の側面が、複雑且つ増大しているのではないか、との懸念を否定し得ないのも事実である。これらの背景の大きな要因は、社会の変化とそれに伴う価値観の変化である。これらの変化そのものの解明と、それとの関係の分析・考察こそがスポーツ社会学の固有領域のひとつである。しかし、わたしの研究は未熟であり、その期待に十分に応えてはいない。しかし、幾つかの論文を発表し、新聞社の求めに応じて書いたとき、こうしたテーマの捉え方、およびその実態を明らかにし、その背景を俎上に乗せる研究姿勢そのものに批判・疑問がなかったわけではない。このこと自体、異質の世界に侵入したエイリアンの当然遭遇すべき“事態”であったかもしれない。しかし、感情論でない次元での論戦が多少繰り広げられた後、やがてこの種の議論は収束に向かったと言える。

つぎに、興味を持ったのは、スポーツをすることで集団がつくられるかという問題である。この問題も愚問であるかに思えた。というのは、スポーツが集団をまとめ、地域社会の形成に機能することは常識として受け取られてきたからである。それは、スポーツのもっている小集団の機能に根ざしている。スポーツはひとりでやるものではなく、みんなで協力してやるものだ、とか、みんなはひとりのために、ひとりはみんなのために（all for one, one for all）とか、何の疑問もなく受け取られてきたからである。

しかし、現実は必ずしもそれを容認しない。スポーツをやったからこそ集団がまとまらなかったり、地域社会がうまく機能しないといったことが無いわけではない。

そこで、実際にこの問題を考える手続きとして、スポーツ及びスポーツ・イベントが集団に及ぼす機能分析を調査結果に基づいて分析・考察した。

①集合意識（collective consiousness）に及ぼす機能

②社会統合（social integration）に及ぼす機能

③政治的社会化（political socialization）に及ぼす機能

未熟な研究結果を総括すれば、確かに、スポーツによる集団形成機能は認められる、ということである。とくに、同質統合（homogeneous relationship）から異質統合（hetero-geneous relationship）への変化が著しい現代社会にあって、スポーツがほんらい的に具有している同質統合的要素の意義は大きい。すなわち、スポーツは集合意識の高揚と、それに基づく社会統合に機能しているのである。これらの機能が企業であれ、学校であれ、地域社会であれ、集団の場でスポーツを取り入れるひとつの要因である。

しかしながら、こうしたスポーツの集団形成機能を、その内容に即してみた場合、問題が無いわけではない。とくに、政治的な経験や学習によって蓄積されたものの習得としての政治的社会化との関係でみた場合、スポーツは必ずしも正機能を果たしているとはいえないのである。政治的社会化の問題は、社会全体の次元での政治に関する習得の側面をもっているが、ここでは個人の次元の問題を取り上げた。すなわち、個人が政治的な態度、感情、信念、判断などとどのようにかかわっているかに限定して、スポーツの機能分析を試みたのである。

その結果、スポーツは必ずしも政治的社会化に正機能を果たしていないことが指摘された。それ以上に、強いて言えば、スポーツは政治的意識をそれほどかきたてず、政治的社会化を遅らせるひとつの源泉（agent）である。

その背景について社会学的視点から二つの要因が指摘されなければならない。ひとつはスポーツの保守性であり、ふたつは小集団としてのスポーツ集団が成員に及ぼす機能である。これらの要因は、「現実を肯定し、批判を好まない」人間関係をつくり出すと同時に、恩と義理の思考・行動様式を育てる温床になっているのではないか、との仮説を導き出し得る。しかし、この仮説検証は未だ手付かずのまま放置されている。

そして、これら二つの、すなわち、個人と集団に対するスポーツの機能分析をすすめてきた必然的結果として、スポーツによって国際平和がつくられるかという問題が関心の的となった。この問題も愚問であるかに思えた。というのは、複雑且つ問題を常に含んでいる国際政治構造（international political structure）の中にあって、スポーツに寄せる期待は大きいからである。国際競技の場で親善をうたわない大会は見られない。ちなみに、五輪憲章は、五輪大会の目的を友好と理解、それに基づく世界平和の達成においている（第１条）。それは祭りの機能としてのスポーツのイベント性とスポーツそのものの特性に根ざした期待・可能性である。

しかし、現実は必ずしもそれを容認しない。国際的なビッグスポーツ・イベントの開催が必ずしも国際間の平和に結びつかないのである。

そこで、実際にこの問題を考える手続きとして、スポーツ及びそのイベントの国際平和に及ぼす機能分析を五輪史にみられる事例調査結果に基づいて分析・考察した。

①国際平和に及ぼした五輪の機能

②国家におけるスポーツの位置

未熟な研究結果を総括すれば、確かに、スポーツのもつ国際平和達成機能は認められる、ということである。とくに、国境を越えたコミュニケーションとしての機能をもつスポーツ及びそのイベントの開催は人類の目と耳を捉え、スポーツ及びそのイベントのもつ期待・可能性の達成に正機能を果たしてきた。だからこそ、スポーツは思想性が大幅に力を失った現代において、唯一最後の宗教としての意味を付与されてきたのである(H. Edwards)。

しかしながら、逆機能の側面が無いわけではない。とくに、二つの世界大戦は３回の五輪大会を中止させたし、五輪大会の開催は多かれ少なかれ国際紛争を創出し、拡大してきた。

こうした逆機能は、国家による体制保持の手段・道具として、また外交手段・道具としてスポーツ及びそのイベントが位置づけられることに起因している。しかし、国際政治構造におけるスポーツ及びそのイベントの機能分析は、政治社会学（political sociology）の理論と方法論の不確定性故にその核心を開いて見せることはかなり困難な仕事であるといわなければならない。

以上、私はスポーツの社会的機能を三つの側面に則して考えてきた。しかし、ここで取り上げた問題以外にも重要な問題があることはいうまでもない。正直なところ、ひとつ問題をとりあげて足を踏み入れると、その周辺と奥に別の巨大な問題が横たわっていることに気付かされてきた。それらの幾つかについては無謀とも思える試みをしてきたが、問題の広さと深さに茫然とする思いである。

それは、また、個人－集団－国際社会といった単純な枠組みの中でのスポーツの機能分析に反省を迫るものでもある。とくに、高齢化を迎えた今日、スポーツは各々の次元でのより有機的な機能分析を求められている。と同時に、従来のスポーツ社会学という枠組のみでなく、学際的な研究の必要性を感じている。

Ⅴ　書評

１　「『高校野球の社会学』と研究者の身体」

清水諭（筑波大学・体育科学系）

たとえ小さくともスポーツ社会学という制度的に確立したアカデミズムにあって、わずかであっても、その中で発行してきた研究誌などを含めたこれまでの蓄積が存在していることは紛れもない事実である。ここに生きている我々は、これらの蓄積を踏まえつつ、それらを批判し、新たな方法論を駆使し、もがきながらも、自らの身体を通して、この学界独自の視角から魅惑的な思考を産出していかねばならない。このことは、我々の当然の総

意であるはずだ。
しかしながら、今回発行された『高校野球の社会学』を読むとき、私はひとつひとつの論文への批判と共に、スポーツ社会学界における研究者の思考とその視線に対して幾分かの危惧を抱かざるを得なかった。
すでに、甲子園研究の視角については、もはや教育として論ぜざるを得なくなってしまった近代スポーツを貫徹している理論の究極の形としての見せ物性のなかで、「甲子園」という「場」において「野球」によって、日本文化の深層にある「青春」「高校生らしさ」の象徴的な解釈の枠組みが毎年、再生産され、伝播されていること。そして、それが祝祭としての要素をはらみながら、個々の地域のアイデンティティと深くかかわり合って成立していること。さらに、これらが百貨店、電鉄、新聞といった1910年代以降、都市における新たな消費の創出を狙った企業家を基軸にしたネットワークによって引き起こされたことも見逃せない事実であること。以上の点が、各論文の中で表されている[1)]。
この上に立って、我々研究者が独自の方法で少しずつでも、これらを実証していき、さらに、この甲子園研究によってオリジナリティーあふれる理論を生みだすことが研究者としての使命だと考える。さらに、現代のスポーツをいかに捉え、批判していくのかといった哲学が明らかにされねばならないだろう。もはや、視角の提示に終始すべき時でなく、地道な実証の積み重ねこそが我々にとって必要な時なのだ。
しかし、この著書はそうではなかった。
最大の問題点は、方法論の欠如と共に研究者の身体性、つまり「目の高さ」である。この著書には、神話と現実を研究者自らの身体で感じとり、高校生とそれを囲む人間達、マスコミ、スタンドやテレビの前の視聴者と同じ目の高さで丹念に取材し、実証したものが見られない。なぜ、この著者達は真夏の甲子園スタンドの暑さの中で、真っ黒になりながら応援席を行き来しなかったのだろうか。または、そのことを読み手に伝えられなかったのだろうか。「高校野球の」と題するならば、なおさらこの視点を忘れてはならないはずだ。
さらに、ひとつのスポーツ・イベントとしての甲子園がなぜ象徴的な意味作用をもたらすのかという点について、V.Turner、J.J.MacAloon、C.Geertz、あるいは山口昌男らの理論をこの著書の総意として提示していない。どのようにして神話的メッセージが生成されてくるのか、どのようにしてそれを解釈するのかといった理論的バックグラウンドが抜け落ちているため、何の根拠も提示されないまま、メディアによって浸食された研究者の感覚で「これが神話である」といってしまっている。
ある意味で神話としての甲子園の渦の中に研究者自体が巻き込まれ、すっかり翻弄されてしまった形になっているわけだ。また、「高校野球の」と題しながらも、どの著者も「甲子園」という一握りの頂点に自然と目がいってしまっている。これらの点は、研究者の根本的身体性と視角についての問題をはらんでいる。特に第１章の杉本氏の論文は、この著書の視角を提示する意味でも重要と考えるが、これら理論的な背景と実証についての方法論が提示されておらず、新たな研究の可能性が見えてこないのは残念だ。その点では、「序論」と「第７章甲子園と「日本人」の再生産」を書いた小椋氏の論文も同じことが言

1)清水諭「スポーツの神話作用に関する研究－全国高校野球選手権大会テレビ中継におけるテレビの神話作用について－」，体育・スポーツ社会学研究，第６号，1987，215-232頁．「甲子園野球の神話分析－記号学からテクスト分析へ－＜池田町’８８夏＞」，体育・スポーツ社会学研究，第８号，1989，27-49頁．「甲子園の神話学」，へるめす，第２２号，岩波書店，1989，19-29頁．「見せ物としてのスポーツの行方」，『スポーツのルール・技術・記録』，創文企画，1993，77-110頁．
津金澤聰廣『宝塚戦略』，講談社，1991．／有山輝雄「マスメディア・イベントとしての甲子園野球」，メディア史研究 vol.-1、1994，102-119頁．／吉見俊哉『博覧会の政治学　まなざしの近代』中公新書，1992．

える。
また、甲子園とそれを取り囲む我々日本人のスポーツについての新たな哲学がこの著書から見いだせない。著者自らが「教育する身体」から飛翔して、近代スポーツの進歩・発展志向、業績主義が行き着いた究極の形としての甲子園を縦横無尽に語らなければならなかったにもかかわらず、旧来の「ある形」の中に結論が行き着いてしまっている。「第５章マニュアル教育としての甲子園」の沢田論文においても、「「競争」中心から、「共生」「共創」に向けて修正や改善が望まれる。」あるいは、「直接的な指導性で能力を引き出す限界を意識すれば、それ以上の能力発揮にはやはり主体性が必要なのかも知れないし、それでなければ全国大会に出られないのかもしれない。」という言説からは今後の方向性は見えてこない。また、ジェンダー論にしても、いわゆる甲子園ギャルの生態を追えば、江刺氏の仮説はもっと現実を見据えた生き生きとしたものになったはずだ。
甲子園は、教育といった「閉じた空間」を論じることを越えて、日本人のもつ身体文化について語ることのできる広がりを持っているはずだ。我々が今日まで引きずってきた「青年」「青少年」に対する神話的解釈についての文化論がこの甲子園の底にあり、この枠組みが崩壊しつつある現代の青年像こそ注目されなければならないのだ。また、祝祭としての甲子園についての実証的な分析がフィールド・ワークから出てくれば、教育という閉じた空間から解き放たれ、視角がより広がったに違いない。
しかしながら、「第２章甲子園と奇蹟」（松田・島崎両氏による）には、ひとつの方向性が見い出せるだろう。賭け、あるいは夢と現実との間を行き来する我々にあって、突然湧き出る涙の「体験」から人間における至高性を論じることは、身体の問題としての広がりを含んでいる。著者らは甲子園の堕落を問題視しているが、その堕落によってより至高性の輝きが増し、我々がより甲子園に引き込まれるシステムがある点を忘れてはなるまい。この視角は日本人の感情と祭、演劇を含めた身体文化論として分析される必要がある。
また、唯一甲子園研究についての理論的背景とその方法論を提示しようとした菊氏の「第４章物的文化装置としての甲子園スタジアム」は、歴史社会学の中で、象徴的な意味作用を分析する可能性を探ろうとするものであり、記号としての生成の場に踏み込み、隠された「それに関係する組織や社会構造の意思や動機に対する社会学的想像力」を見ようとする。理論構築をめざすとすればいささか大きすぎるテーマだが、菊氏は最終的に、都市における消費や技術の発展との関わりの中で、甲子園の意味的作用の生成を歴史的に分析していく方向を指摘している。このことからすれば、安部磯雄と小林一三とのかかわり、甲子園スタジアム建設の際の建築士の記録等々、ネットワーク史から人間の動きを浮かび上がらせることが必要になると思われる。そこには、菊氏の枠組みには表れ得ない精神史のダイナミックな生成の動きが見られるだろう。
この著書を読んで、単なる甲子園研究についての批判以上に、我々研究者の思考とその視線の向こうにある危うさについて考えたことを述べた。今後も、甲子園という具体的なテーマについて、抽象的な概念の羅列に終わらない、具体的な実証をともなったオリジナリティーあふれる理論が提示され、深くて幅の広い、何より公明正大な議論が我々研究者の中で数多く行われていくことを期待してやまないからである。

2　原田達著　「マラソンの現象学」に学ぶ　－スポーツと社会への「対抗」－

甲斐健人（筑波大学・体育科学研究科）

この小稿は原田氏が『追手門学院大学文学部紀要』29号（1944）に発表された「マラソンの現象学」というユニークな論文についての筆者の感想や疑問を記したものである。原田論文を一読したとき筆者は新鮮な驚きを覚えた。その驚きとは同論文が①原田氏自らのマラソンの体験に基づいた記述であり、生き生きとした心情が文脈からあふれていること、②マラソンを題材にして「近代」を射程にとらえた議論がなされていること、の二点に由

来するのではないかと思われる。前者によって同論文は読み手を惹きつける不思議な魅力を放っている。氏は同論文を「内観的方法をとったきわめて主観的な叙述」と述べ、「マラソンの現象学的記述」と呼んでいる。後者については、従来のスポーツ社会学における議論においてはほとんど見られなかった射程の長さが示されており、スポーツを社会学するひとつの可能性を示しているのではないだろうか。以下、筆者なりに同論文の文脈を追いかけながら筆をすすめていきたい。

この論文は'70年代以降の日本におけるジョギングの隆盛を指摘した上で、ジョギングは現代人の「健康志向」と結びついて理解されがちであるが、「健康志向」が背後に持つものをマラソンを素材に摘出してみようという問題提起から始まる。そのことは「近代」の再考にもつながると原田氏は見通している。まず、フル・マラソンの現状を把握するために'92年度、'93年度の統計資料が議論の前提として紹介される。

さて、問題の「健康志向」とはランナーたちに「走りはじめた動機」を質問した結果から得られた理解であった。原田氏は「動機」のもつ限界を指摘し、「健康志向」の背後に存在するランニングの意味付け図式（ランニングイデオロギー）を明示し、マラソンを日常的「苦労」の回収作業として理解する。そこにはランナーを支えるサポーター（沿道で応援してくれる観客）や「同行者」（「一緒に」走るランナー）の存在も見逃せない。ここで原田氏は近代社会の産物である旅とマラソンとの共通点（「苦労」の回収、「同行者」など）を指摘し、マラソンと近代について論を展開する。デパートや近代的教育システムの議論を交えながら、「極端な接近可能性と極端な接近不可能性の併存」という近代社会の基本的な構成原理をマラソンも保持していることが明らかにされる。

以後、議論は市民マラソンへの参加が近代社会への「対抗」たりうるのかという文脈へと展開されていく。まず、「巧妙で冷酷な近代の選別の論理に対する代償的実感を味わうにはうってつけのスポーツ」としてのマラソンが「近代社会を安定化する機能を担っている」可能性が指摘される。一方では、フル・マラソンでは社会的属性を越えた身体能力による集団（「同行者」集団）が形成される事実に注目し、「輻輳する関係（役割）のなかで人間を引き裂く社会」である近代社会を乗り越える可能性も指摘される。さらに、マラソンの種目特性として「消耗」を焦点にした考察も行われ、「社会的痩身」というメタファーの下にランナーたちが「単純化された社会の解釈図式を獲得すること」が論じられる。しかし、この獲得課程はともすれば社会的安定のための課程とも理解できそうであった。果たしてマラソンは社会への「対抗」理論を生み出し得るのであろうか。

マラソンやランニングさらにはスポーツが既存社会に対して「保守的なもの」にすぎないという立場に対して、原田氏は「ふつうの人々」の「日常生活」に立脚することで、その過度な観念主義、エリート主義を批判する。現実社会からの「離脱」としての対抗ではなくて、「和解」や「回帰」としての「対抗」を語る氏の主張には共感を覚える[1]。しかも議論の過程で氏はマラソンが社会に対して「対抗」的か否かと何度も問い返す慎重さと周到さを示している。

その原田氏に対する筆者の問いは、対抗的な心情がどのように「編制」されることによって「社会に対する対抗の論理に転化する」のかという点である。「現実とはけっして客観的なものではなく、主観的に構成されたもの」と把握する立場から、この問題に対する論理が引き出せるのであろうか。

もうひとつの疑問は、マラソンは本当に「だれにでもできる可能性をもったスポーツ」なのだろうかという点である。確かにマラソン参加者の社会的属性は多様であるだろう。しかしながら、そこには洩れ落ちる人々はいないのであろうか。スポーツへの参加を契機にした対抗性に関する議論は重要であろうと思われる。それだけに、今後はその限界に関する議論も必要とされてくるのではないだろうか。

原田論文はその他多くのことを語っている。例えば、スポーツというカテゴリーではなく種目を特定した議論が必要とされていること。同一種目のなかでもエリート・マラソンと市民マラソンとが違っているように、質的差異が存在すること。就労女性とマラソン参加との関係がさり気なく暗示されてもいる。自らの体験に基づいて生き生きと記述された原田氏は、走りながら社会学しているのかもしれない。筆者は自らのスポーツ体験を振り返り、「勝利」という目標の合理的追究からなかなか離れられない自らの身体を感じ、本論文からまた別のスポーツの楽しみ方があることも教えられたように思う。

1）高校の体育活動の現場が教えてくれる。関連して、拙稿「高校ラグビー部員の『戦略』としてのスポーツ－z高校の事例－」『年報筑波社会学』6（1994、発行予定）を参照されたい。

Ⅵ　フィールド・ワーク

1　「中国農村調査事始め」

中島　信博（東北大学・教育学部）

最近になって、中国の農村を毎年のように訪れているので、そこでの「フィールド・ワーク」から感じているところを報告してみたい。といっても、今年で4年目であり、毎回の滞在も10日余りであるから、巨象を撫でることにさえ至っていないかもしれない。しかも農村社会学あるいは農村経済学を専攻する人々が共同研究者であり、私自身も今のところ農村をめぐる状況の把握に関心が向いているので、「スポーツ」に直接関連する話題が少ないことをお許しねがいたいと思う。

中国に行くことになったのは、東北大学の細谷昂先生（情報科学研究科教授・社会学）のお誘いによる。先生をはじめ農村調査の先輩たちと同行できて、いつもながら啓発されることが多い。インタビューに同席している時はもちろん、調査の合間、移動の車中や宿舎での歓談のなかに、研究のためのヒントが散りばめられているといつも感じている。

調査の対象地は河北省辛集市近郊の農村。北京から列車で南西に約4時間で省都の石家荘市に達するが、そこから車で約2時間余りのところにある華北平原の畑作地帯である。さまざまな経緯からここがフィールドとして選定されたが、はじめの2年は調査の打ち合わせに費やされたと言っても過言ではない。中国側の共同研究機関である河北省社会科学院との交渉それじたいが、我々にとっては生々しい異文化体験であり、また、人間と人間とのぶつかりあいだった。詳述はできないが、調査の設計あるいは実行じたい、日中両国の分厚い人間関係の上にしか成り立たないことを実感した。

それにしてもタイミングをはかったかのように、近年は経済界を中心に一種「中国ブーム」の感を呈している。新聞に取り上げられることの多い国としても、中国が米国に次いで第二位とか。日本を先頭に、NIES諸国が続き、さらにASEAN 諸国が追う、という雁行経済が、中国の急速な登場で変化しはじめた、といった論調が目につく。

調査対象地を数年間見ているだけでも、確かに「高度経済成長」を通過中との印象を強く持つ。内陸部の農村地帯なので、軽工業中心の郷鎮企業がそれこそ雨後のタケノコのごとく活況を呈している。中国側がインタビューの対象者を選定するときに、いわゆる「優良事例」を推挙しているという事情はあるだろうが、それにしても人々の眼の輝きが生き生きとしていることに圧倒される。ちょうど戦後日本の、焼け跡、闇市を想像させるような、活気といかがわしさに満ち満ちている。日本から中国を観ていると、さしあたり国家の政策や経済の情勢が眼に入ってくるが、現地に入って農村末端から観てみると社会の基層に起こっている変化を目の当たりにできる。

急激な工業化、都市化が生活にどのような変化をもたらすのか。農村や農家はどのように変わろうとするのか。都市と農村との関係はどうなるのか。ありきたりかもしれないが、当面はこうした情況の変化との関連で、スポーツや余暇の問題を追跡していきたいと考えている。

農村を歩いていて目に留まった問題の一つとして、我々の関心に近いところでは、たとえば「業余体育学校」の存在が気にかかっている。トップ・アスリート養成システムに人材をリクルートしてくるための、いわば地域最末端の吸引口ともいうべき機関ともいえるが、他方で、農村地帯でどのような社会的機能を果たしているのか見定める必要があるようだ。

農村の内部のことは、まだまだ分からないことが多い。おそらく農家の生活も急激に変化するだろう。私としては、娯楽や年中行事といった側面からアプローチしてみたいが緒についたばかりである。

それにしても、中国は巨大な実験を行っているとの感を強くする。今後どのようなプロセスを経て、どのような社会を形成するのか。そこには、新たな、そして独特の仕組みが創造されるのか。それとも先進諸国が失敗も含めて通ってきた道を、同じように駆け足で体験するのか。いずれにせよ、中国を観ることで、これまでともすれば欧米ないし英米偏重であった私自身のスポーツを観る眼が、いわば多極分散することの必要性を教えられたような気がしている。

2　「伝統遊びは消失するのか」

佐川　哲也（金沢大学・教育学部）

タイ国のウボン県をフィールドとして調査を始めて10年が過ぎた。途中1990年から1991年にかけては９か月あまりの留学を含めて、毎年２週間ずつウボン県を訪れては、タイ農村の移り変わりや子どもたちの生活の様子、特に遊びやスポーツの状況について見てきた。今年は８月にウボン県を訪れたが、10年前とは比べものにならない程の変化を感じずにいられなかった。バンコク市から遠く離れた国境の県でも、県庁所在他のウボン市では、道路が整備され、ローカル空港が国際空港になり、自動車が急増し、観光局が開設し、高層マンションが建ち、セブン・イレブンも進出してきた。農村でも、テレビの台数、個人商店の数、市場の立つ日数、バイクや自動車の数は増え続けているようだ。10年前には、バンコクの繁栄と農村の貧しさが強烈なコントラストとなって、初めて東南アジアをを訪れた日本人の心を大きく揺さぶった。それは「貧しさ」とは何かという問いであった。10年後の今年の印象は、農村にも「モノ」が溢れてきたという印象である。しかし、バンコクはそれ以上に繁栄を続けている。確かに農村には「モノ」が増えたが、はたして人々は、豊かになっているのだろうか。「貧しさ」という問いが「豊かさ」とはという問いに変わった。

ウボン県は東をラオス、南をカンボディアに接する。タイ国で最も東北に位置するタイ国で最も貧しい東北部の農業県のひとつである。ウボン市在住者以外のほとんどが農業に従事している。主な作物は稲であるが、モチ米を主食としながら、売値の良いウルチ米を生産して生活している。水に恵まれない地域では、キャッサバや麻類などを生産している。雨に命を預けた決して楽な生活ではない。農民の多くは今でも手作業で田植えや稲刈りを行う。１か月以上もの間、家族総出で稲を植え続ける。８月は田植えが終わりを告げる季節であった。

1988年12月より、遊びに関する調査を続けている。1988年当時には、農村の子どもたちの中に、数多くの伝統遊びを見ることができた。それは、都市部の子どもたちがもっぱらスポーツを行っていたのと対照的で、都市部で伝統遊びが消失の危機に瀕していることを示すものであった。この数年で、農村の子どもたちの遊びが変わろうとしている。以前には空気の抜けた朽ちたボールが倉庫に転がっていた村の学校で、今では一日のうちにサッカーやバレーボール、セパックタクロー、卓球を毎日観察することができる。伝統遊びは何処へいってしまったのだろうか。それはまるで、外来の植物が猛威を奮って帰化植物になっていく過程のようである。近代スポーツが伝統遊びを駆逐していく。農村の子どもたちは忙しい。早朝に起き出して、家畜の世話、水くみ、家の掃除など両親を手伝ってから

学校へ行く。学校は４時に終わり、家に帰ると再び家事手伝いが待っている。夕刻の村の通りでは、手伝いをする子どもの姿はあるが、遊んでいる子どもたちの姿はほとんどない。子どもたちが遊べる時間の多くは、学校にいる間である。授業の前、昼休み、帰宅前の時間が彼らのわずかの遊び時間である。朝８時頃から夕方４時頃までを学校で過ごす。農村の子どもたちにとっては朝夕の時間は遊んでいられない忙しい時間なのである。学校はスポーツを教材として教えている。十分な設備や用具を備えているわけではないが、子どもたちにとってもスポーツは楽しい時間である。近頃は学校対抗のスポーツ大会も開催されるようになり、先生たちも子どものスポーツに何かと熱心になっているようだ。その結果として、伝統遊びが駆逐されていく。村人に聞いても、最近の子どもたちは昔の遊びを知らないという。事実、竹馬などはタイ農村でもほとんど見られなくなった遊びの代表である。

東北タイ農村で子どもの遊びが変容している。それはまさに伝統文化の消失である。あまりに急激な変化に、十分な資料収集ができないままに手をこまねいているのが、今の実情である。どんなモノサシでこの変化を測ればよいのか、確信が持てないままに事態が進行していく。無力な外国人が「近い将来、タイの伝統遊びが消失していく。このままでよいのか。」と、ひとり叫んでいる。

Ⅶ　異文化の中で考える

1　「英国スポーツ文化の渦の中で」

坂上康博（福島大学・行政社会学部）

８月20日の土曜日、英国では、サッカーのプレミア・リーグ（１部＝22チーム）が開幕した。ぼくも、190ポンド、日本円で約３万円のシーズンチケットを購入し、地元チーム「コベントリーシティーＦＣ」のスタジアムに向かった。ワールドカップの熱狂は、まだ記憶に新しい。

チケットを予約したのが５月末、と遅かったのであまり期待していなかったが、行ってみると、ホームスタンドの中段でほぼ真ん中というゲーム全体を見渡せるなかなかいい席だ。シーズンが終了した５月中旬から一切使用せずに、この日のために入念に手入れがなされてきた芝のグランドは、ローラーできれいな縞模様がつけられているのでまるで緑のじゅうたんのように美しい。

ぼくの左隣の席が、留学先のウォーリック大学社会史研究所のトニー・メイソン。彼は、ゲームが始まると身を乗り出してボールの行方、選手の動きを見守り、これは翻訳がなかなかむずかしいのだが、「いいパスだ！」「よし今だ、行け！」等々の声援を送ったり、「何だ今のは！」「ウィリアムズ、お前何やってんだ！」等となじったり、時々ぼくや回りの人に向かってまるで解説者のような見事な解説を披露したかと思うと、携帯ラジオで聞いていた他の試合をアナウンサーのように実況中継し始める。彼の『英国スポーツの文化』（同文館）の中に、「サッカーファンのなかには、自分のみている試合のほかに、他の試合の途中経過を知りたいという人もいた。他の試合の放送中継を聞くために、かなり扱いにくい電池式のラジオを試合にもっていった観客がいた、というかなり早い時期の例のひとつとして、1928年のストーク市の例がある」（86頁）という一節があるが、その現代版がトニー・メイソン本人なのだ。とにかく彼は、90分の試合時間中ほとんどしゃべりっぱなしである！

ところで、右隣の席は70才くらいのおじいちゃんで、わくわくしてくると「もみ手」が始まり（そのタイミングはゲームの進展状況よりワンテンポおくれる）、チャンスやピンチの後には必ず回りの人に話しかけ、ハーフタイムにはポケットから空色の包み紙の飴をひとつ出して食べる、ちなみに、コベントリーシティーＦＣのチームカラーは空色で、愛

称は「スカイ・ブルー」なのだが、このおじいちゃんが飴の色まで気を使っているかどうかは定かではない。

今日までホームで、対ウィンブルドン、アストンヴィラ、リーズ、サウスハンプトンの４試合があったが、どれも７～８割くらいの観衆の入りだった。１万８千人収容のスタジアムなのだが、１万１千から５千人の入りである。特に２番目の試合は、対戦相手のアストンヴィラがリーグ屈指の強豪であり、そのホームがコベントリーの隣のバームンガムであり、この試合が近隣の町同士の対抗戦（これをダービーという）となること、さらにそれがこの日の行われたリーグ唯一の試合であること、などからトニーは「超満員のスタジアム」を予想していたのだが、この期待は見事に裏切られ、われわれの向かい側のメインスタンド（一番高い席）の空席はなんとウインブルドン戦の時よりも目立っていた。

トニーは落胆しながらいう。「クラブが収益をあげるために入場料を高くしてしまったし…」。たしかに、ぼくたちが買ったシーズンチケットも、当日券10ポンドも英国の物価から考えて決して安いとはいえない。また、試合が始まる前にトニーが、スタジアムの回りを案内してくれたが、その時、「1970～80年代には、この付近で頻繁に暴力事件やいざこざがあって、このあたりの住民はサッカー嫌いになってしまった」とも言っていた。

サッカーの年間観客数は、1950年代初頭の4000万人から、1980年代初頭には2000万人へと半減している。その直接的な原因は、既婚の男性が土曜の午後の大半をサッカー観戦に使うことにいや気がさしたためであり、その背景として、(1)テレビの普及（この日のコベントリー対アストンヴィラ戦は、衛星放送で実況中継された）、(2)娯楽の多様化、(3)フーリガニズム、(4)郊外への人口移動、(5)フェミニズム などが指摘されている（Richard Holt, SPORT AND BRITISH, 1989, p.318）。このうち、(4)と(5)については少し補足が必要だと思う。

トニーの話しによると、英国では、一般的に1930年代頃から都市中心部のスラム化等によって住民の郊外への移動が始まり、この動きは戦争による中断をはさんで、戦後とくに1950年代以降本格化したそうだ。この話をサッカースタジアムが100年以上も前から市のほぼ中心部の労働者の居住地区の中にあるコベントリーにあてはめて考えてみると、こうした郊外通勤者の増加が、コベントリーＦＣの観客動員数に少なからぬ影響を与えたであろうことは容易に想像できる。

次にフェミニズムとの関連。トニーが、ぼくにシーズンチケットの購入を勧めた張本人なのだが、その時彼は、何度も何度もうちの奥さんと相談したかどうか、彼女はうんと言ったかどうか、かなりしつこくぼくに聞いた。ぼくは、最初金銭的なことを気遣ってくれているのだと思って、心配をかけないために我が家の年間予算案を英訳して彼に手渡しだいじょうぶなことを示したのだが、彼が心配していたのはそれよりも、「土曜の午後にショッピングや家族との団欒をふってサッカー観戦に出かける」という行為そのものだった（日曜日にはほとんどの店が閉まるのでショッピングにとって土曜日は決定的に重要！）。この家族のプレッシャーというものは、たしかに我が家でも相当のものだ。

さらに1950年代以降は、スタジアムの観客のあり方自体も変化していったといわれている。それ以前の観客は、職場や居住地域、家族や友人を単位にしたグループによって基本的に構成され、スタジアムはお互いの「顔見知り」たちであふれていた。それが、先にのべた郊外通勤者の増加などによって崩壊していき、若者たちをコントロールしていた親や「顔見知り」の視線もスタジアムから消える。こうしたスタジアムは、自由を獲得した若者たちが縄張り意識等を誇示したりする一種の「コミュニティーの代用物」として機能し始める。フーリガン登場の舞台は、こうした社会的な文脈の中で作られていった（ibid, pp.335-343）。

また、1980年代以降には支援企業とクラブの関係が強化され、選手たちのユニフォームにも企業名がしっかりと刻み込まれるようになる。ちなみに昨シーズンリーグ優勝したマンチェスターＵＴのユニフォームには、日本企業のＳＨＡＲＰ、コベントリーシティーＦＣのユニフォームにはフランスの自動車会社ＰＥＵＧＥＯＴの名前が輝いている。

こうした「社会学的」な知識は、しばしば私たちを憂鬱にしてしまう。しかし、生のスポーツ観戦の面白さはそうした憂鬱を吹き飛ばしてしまうだけのパワーがある。昨日、「スポーツと女性」というテーマで、ウォーリック大学の「スポーツと社会」研究センター主催のコンファレンスがあり、最近 Sporting Female という挑発的な本を書き上げたジェニファー・ハーグリーブスをはじめエリク・ダニングら計４人の報告があったが、こういうわけで、僕とトニー（彼はダニングの報告の司会だった）はこの２人の報告が終わって昼食をとった後、会場を抜け出し、コベントリーシティーＦＣのスタジアムに向かった。（1994年9月25日記）

2 「日本で異文化を教える」

夫　基源（茨城大学教養部）

私は韓国の江源道春川市にある江源大学校師範大学体育教育科に籍を置きながら、現在は茨城大学教養部で1993年10月から1995年3月までの1年半の間、教養部科目である「現代スポーツと社会」と「韓国の生活と文化」という授業を担当しております。

初めに日本に来た年が1975年秋ですのでもう19年になります。日韓の間を行きもどりつつ、最初研究生として2年半、1年間帰国後大学院生として4年、また8年後には外国人研究員として1年、そして、今回は去年の10月、日本の大学の教官として再来しました。日本での生活は、かれこれ8年半にもなります。しかし、今回の来日が今までの日本での生活の中で精神的、身体的に一番厳しく感じております。身体的には、年輩の方には申し訳ないとは思いますが、年のせいだと思い切ることはできます。だが精神的側面についていえば、学生の身分の時にはただ先生に教えてもらいたい気持ちで精一杯だったし、研究員の時には、韓国から持ってきたテーマをこなすことで満足しておりました。しかし、教える立場からの今回の来日においては、言語を含めた異文化理解の必要性とむずかしさ・厳しさを痛感しています。とりわけ、「韓国の生活と文化」の授業は初めての経験ですし、日本に来る前にある程度の用意はしてきましたが、学生たちの関心を知るにつけてあまりにも韓国に対する日本の側の情報のなさを思い、加えて自分の国の文化を一から日本語で説明することのむずかしさは、言葉でうまく表現できませんが、なかなか大変だというのが本音です。一般教養総合科目としての「現代スポーツと社会」についても、いままで韓国で教えていた専門科目としての「スポーツ社会学」をやればいいというのでは、授業は成り立ちません。

一つの専門領域として勉強してきたスポーツ社会学を、専門ではない一般の大学生に理解してもらうには体育・スポーツ以外の関連諸科学全般との共通理解なしには無理ではないかと思います。

スポーツ社会学がより以上の学究的な進歩をとげるためにも、様々な関連分野の人々とのざっくばらんな内面的交流を通じて、ことの本質を学び合っていく態度が大切であると痛感しています。

Ⅷ　海外学会だより

Report from XⅢth World Congress of Sociology

清水諭（筑波大学・体育科学系）

はじめてWorld Congress of Sociologyに参加したが、４年に１回ということもあってか、Niklas Luhman(Univ. of Bielefeld)、Anthony Giddens(Cambridge Univ.)、そして、Alain Touraineなど社会学界のオールスターたちが顔をそろえた見せ物的要素が強いように感じた。大ホールでのPresidential sessionでAlain Touraineの「肉体と理性」につい

ての講演のまさにその最中に、Bielefeldで有名だというひとりのストリーカーが壇上に上がり、約２分間ポーズを取りながらゆっくりと歩いたというあたり、見せ物としての学界のハイライトであったと思う。しかし、このPresidential sessionで、Alain Touraineが「肉体と理性」についての話をするくらい、社会学界が今まで忘れていた身体について真剣に考えようとしてきているのは確かである。

今回の大テーマは、“Contested Boundaries and Shifting Solidarities”。このテーマは、globalizationとlocalization、各地域の持つ伝統と近代そして、現代の問題とを重ねて考えることのできる大きな問題である。

一般的に、発表者の話を聞くに徹することで終わってしまう学会にあって、非常に活気に充ちた討論を繰り広げていたのが“AD HOC Session　The Body in the Social Sciences”だ。通常、頻繁に活動している組織が４年に１回のこの学会でも討論しようというのがこの“AD HOC Session”。３０人ほどの参加者によって４日間繰り広げられた。参加者の誰もがその力量を認めており、本人もそれを自覚してイニシアチブを取るBryan.S.Turner（現在オーストラリアのDeakin Univ.）と彼がEssex Univ.にいた時のイギリスの仲間達が中心に議論を重ねていったのだが、このセッションの熱気は並々ならぬものがあった。Bryan.S.Turnerに対する各国の研究者の視線は一言たりとも漏らさないという緊張感を含み、Bryan.S.Turner自身も中核としての自信をもって発言していた。彼はまた、どんな人の意見にも耳を傾け、コメントする幅の広さを持っているので、時折見られたorganaizerとのpower politicsに対して、ほとほと困惑した表情をみせていた。

Bryan.S.Turnerは、昨年Deakin Univ.においてThe Center for the Body and Societyを設立、今回は設立後初めての国際学会ということもあってか、この組織の広報にも力を入れていた[1]。すでにThe Body and Society(1984)、Medical Power and Social Knowledge(1987)、Regulation Bodies(1992)などを出版している。Bryan.S.Turnerの他に、Chris Shilling、Elisabeth Eakermann、そして、今回は欠席だったがMike Featherstone、Pasi Falkなどがこの組織において中心としての力を誇示しているようだ。

その彼の身体への接近の仕方はいかなるものだろうか。彼は、病いillness、病気diseaseの社会的特質を理解するために身体に注目している。まさに、主観的身体と客観的身体との緊張関係がみられる医療行為は、主観／客観の二元論を越える新たな理論を見つけるのには格好の材料がそろっている。また彼は、この緊張関係がいかに消費主義の中で拡大させられるのかに関心があるとして様々なアプローチを試みているようだ。

彼は、Ulrich Beckの“risk society”の概念を基盤にして現代社会における身体と自己を考えようとする。Ulrich Beckは、近代化の中で、自己についての認識がいかにできてきたのか、そして、現代の環境の変化、汚染の拡大、リスクの多様化の中で、自己がいかに変容してきたのかを示そうとしている。政治的環境の変化や汚染の拡大は、どれも身体がターゲットになっており、その意味で今日、身体と社会は切り放しては語れない状況だ。身体が、政治的・文化的活動の主要な分野であるひとつの社会システムになっているのであり、社会の緊張・危機の政治メタファーに身体がなっていると考えるのである。

確かに彼が以下に挙げるように、現代においては、多くの身体に関係したできごとがある。

フェミニスト運動、エイズ・キャンペーン、反人口中絶キャンペーン、人口増加もしくは抑制政策、臓器貯蔵制度、セーフ・セックス・キャンペーン、拡大するスポーツの観衆、予防医学の運動、拡大するツーリストの持ち込むポルノグラフィーの管理、緑の運動、原住民の運動、など。

このような状況における自己と社会との関わりを彼は、理論化しようとしているのだ。彼に言わせれば、このような社会は「つながりのない、社会的な組織が崩れてしまったひとつの世界」で、その中に起きる様々な現象は、自己と身体と社会との間の強くなっている緊張の表現ととらえることができるのである。つまり、「私は誰なのか」というような問いがまさに身体そのものを通して頻繁に生起しているのであって、アイデンティティが重要な課題として我々の前にあることを提起している。

今回のBryan.S.Turnerの発表は、このような理論を下敷きにした理論的なレヴューと様々な問題提起にとどまっていた。僧侶のような風貌で、いかにもお勉強好きという感じのChris Shillingも、予想に反せず、理論的なレヴューで終わった。身体を分析する際の歴史的方法と象徴的な方法の中で、gender、athletic body、physical bodyを題材にした場合、身体の変容をいかに記述していくのかについての先行研究をまとめたにすぎなかった。

これに対して、David Le Bretonは、エネルギーの概念、その使い方の違いについて述べた。中国や日本とヨーロッパの医療とそこにおけるエネルギーの概念の違いについて語ったのだ。トランス状態においての医療とか手当ての意味についての考えは、興味深いものがあった。

さて、問題はなぜ今社会学が身体を問題としているのか、そしてそのような状況を社会学理論がいかにして説明する可能性を持っているのかであろう。

すでに1960年代からの民族学的思考において、宗教的、シャーマニスティックな行為を含んだ儀礼、あるいはそこにおけるゲーム、ダンスといった身体文化を取り上げることで、西欧文化中心の思考を相対化しようという流れがあった。しかしながら、今日の社会学者の視線はこれとは違ったところにあることは確かである。そして、この視線の先にあるものを見ない限りは、Bryan.S.Turnerらの生きている人間個々人の身体を具体的に説明しえない理論的研究になってしまうだろう。そこからは、新たな理論が出てこないように思う。

社会学者の視線を身体に向けさせているひとつの理由は、生産主義に対する批判と危機感にあろう。絶えず物質としての何かを生産しようとする思考の限界が見えていること、そして、本来その最も基礎になるべき身体あるいは、身体と自然との関係が疎外されてきたことが我々の身体を通して感じざるを得なくなってきているからである。その意味で、忘れていたはずの身体が、資本主義の最終ターゲットとなった現代においてこそ人間の生活の物質的前提条件とは何かをあらためて考えなければならないだろう。そして、生産主義的イデオロギーをもつスポーツの業績主義、進歩・発展主義が、身体文化という大きな枠からみればどのような特質を持つものなのかを再度考える必要があるのではなかろうか。

この点からすれば、生産主義的思考以前の伝統的ゲームとそこにおける身体に注目することもひとつの方法だ。非物質主義的なものの生産という点で、近代化の過程の中で忘れ去られたものがこの伝統的なゲームの中に見いだせるのではないだろうか。新たな意味として伝統的ゲームを考えることができるならば、そこに身体、アイデンティティ、疎外あるいは、身体、生産、社会といったキーワードで思考していく可能性が生まれると思う。

まさに、この点で、日本人の、いやアジアにある身体性を具体的に取り上げ、考察して

---

1)The Center for the Body and Societyは、1994-1995の中心的課題を次のように　絞り、それに集中するとしている。
- bodies and ageing process:
- indicators of women's health status:
- the problematic of diagnosing disease states(chronic fatigue syndrome. coronary heart disease):
- the body in the environment and the negotiation of risk.

2)The Secretary. The Center for the Body and Society. Faculty of Arts, Deakin University, Geelong VIC 3217.　Phone;(052)272413/271284
Fax;(052)272155　E-mail;bodycentre@deakin.edu.au
（XⅢth Wopld Congress of Sociology;1994.7.17-23.,ドイツ,Bielefeldにて）

なおこの論考は、Idra tforsk（スポーツ研究所、デンマーク）のメンバーであるHenning Eichberg、Jorn Moller、Claus Boje、Soren Riiskjarとの対話の中から生まれてきたものであることを記しておく。

いくことは大いに意味があることと思う。日本あるいはアジアの身体性について深く検討し、その身体性から様々なことを世界の中で議論し合うことが今こそ必要だろう。もはや、ひとりやふたりがこのような学会に出て発言する時代ではない。どんどんと外に出て発言していく必要があるし、感覚のすぐれた欧米の研究者たちはそれに期待している。このような意味でも、“Contested boundaries and Shifting Solidarities”というテーマは、身体が重要な鍵を握っているのである。

前ページ註に、The Center for the Body and Societyへのアプローチ方法を記したので参照されたい[2)]。

Ⅸ 会員の異動

所属変更
中島信博

市毛哲夫
阿部耕也
荒井貞光

大山智徳

住所変更
阿部耕也

坂上康博

清水　諭(1995.5まで文部省在外研究)

黄　順姫(1995.3まで海外研修)

編集後記

清水会員から「学会だより」９・１０号の編集を任せられて、一時はどうなることやらと不安でしたが、ご覧の通りお願いした原稿はほとんど寄せられました。原稿を寄せられた会員の皆様有難うございました。今、本当に安堵しているところです。しかし、書評が一本期日に間に合わなかったのが残念でした。デンマークから清水会員が、是非この号に!とファックスで２本も送って来てくれましたので、その穴も埋められました。

「スポーツ報道の現場から」「フィールドワーク」など新しい企画を入れてみましたが、出来栄えは如何でしたでしょうか。是非、ご意見をお寄せ下さい。会員の皆様からの提案、情報、原稿をお待ちしております。

今回も、編集の一部を橋本会員、甲斐会員、張会員他に手伝ってもらいました。缶ビール程度では、割に合わない作業だったと思います。いつもながらありがとう。

松村和則（学会事務局）

メンタルトレーニングワークブック

中込四郎（編著）　Ｂ５判　216頁　2300円
土屋裕睦，高橋幸治，高野　聰

我が国で出版されたメンタルトレーニング関連図書は，翻訳書も含めると40冊以上にのぼる。このような現状の中で著者らは，読者にメンタルトレーニングの方法をより具体的に伝えることを意図した。本書はメンタルトレーニングの指導者ばかりでなく，現役スポーツ選手あるいはコーチのそれぞれの立場から，活用が可能である。

本書の主要な内容は以下である。各技法の解説をした後，それを日常のスポーツカウンセリングの中で適用した実践例を紹介した。また，読者のメンタルトレーニングの実践に供するため，著者らが実際に使用している作業シートを掲載した。読者が本書を通してメンタルトレーニングにさらに関心を深め，より身近なものと感じ，そして自ら実施継続へと動きだすことを願っている。

目　次

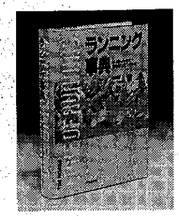
Ⅰ　メンタルトレーニングの理論と実習
1　オリエンテーション
2　リラクセーション技法
3　自己への気づき
4　ピークパフォーマンス分析
5－1　バイオパフオフィードバック
5－2　ゴールセッテング
6　イメージトレーニング（基礎）
7　イメージトレーニング（応用）
8　試合開始前および競技遂行中の心理的調整
9　積極的思考
10　まとめおよび反省会
Ⅱ　メンタルトレーニングの実践例の紹介
Ⅲ　作業シート

〒171 東京都豊島区高松2-8-6 ＴＥＬ(03)3955-5175 FAX(03)3955-5102　道和書院

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24　**大修館の最新刊**　電話 03-3294-2221＜大代表＞

Lore of Running
ランニング事典

●ティム・ノックス 著
●日本ランニング学会 訳



医者でありランナーである著者がこれまでの科学的研究成果を駆使し、まとめ上げた全書。生理学・心理学・トレーニング学・医学などとランニングの実際とを緊密に結び付けた本書は関係者必携のバイブル。
●B5判・上製・600頁 定価7,931円

ランナーのメンタル・トレーニング

●ジョー・ヘンダーソン 著
●山地啓司 監訳／渡植理保 訳

ランナーに必要なタフネスとは何か、特にランナーの内面的な心の問題を解決するため、スポーツ心理学の研究成果や一流選手の言葉を引用しながらメンタル強化の必要性を説く心の強化書。
●四六判・290頁 定価1,339円

文部省認定・(財)日本レクリエーション協会公認資格
〈レクリエーション・コーディネーター〉テキスト

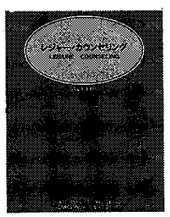
レクリエーション・マネジメント

●日本レクリエーション協会 編

余暇への関心が高まりつつある現在、人々はどんなレクリエーション・サービスを求めているのか。レク組織の育成とマネジメントの理論と実際を詳述。
●B5判・288頁 定価2,575円

レジャー・カウンセリング

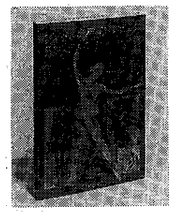
●日本レクリエーション協会 編



個人のレジャーとライフスタイルの関係を軸に、カウンセリングの手法をレジャー分野に応用した余暇生活支援法を解説する日本で初めての本。簡便なワークシート付き。
●B5判・240頁 定価2,575円

フィットネス・リーダーズハンドブック

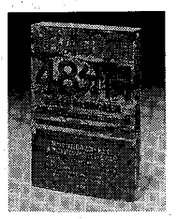
●E.D.フランクス/E.ハウリー 著
●窪田 登・小沢治夫・福永哲夫 訳



様々な受講者に応じるため、指導者のレベルアップをめざす格好の書。米スポーツ医学会(ACSM)のシステムに添って、プログラム作成、最新情報、安全への注意点など、内容は具体的。
●B5判・248頁 定価2,884円

クリーブランドVS.ボストン
NBAの死闘「48分間」
息づまるゲーム展開の全記録

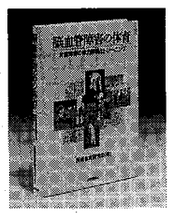
●ボブ・ライアン／テリー・プルート 著
●松崎広幸 訳



1987年1月に、ボストン・ガーデンにおいてくりひろげられた、ボストン・セルティックスとクリーブランド・キャバリアーズの死闘「48分間」を、双方の担当記者が克明に描いたユニークな本。
●四六判・384頁 定価2,060円

脳血管障害の体育
片麻痺者の体力評価とトレーニング

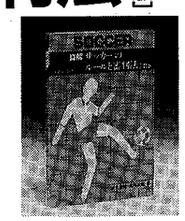
●医療体育研究会 編



脳血管障害に対するリハビリ医療の中に体育的な側面を取り入れ、運動やスポーツ指導を通して実績を重ねてきた筆者らが、その経験や知識・ノーハウを1冊にまとめた最初の手引書。
●菊判・上製・296頁 定価3,914円

詳解 サッカーのルールと審判法 [三訂版]

●浅見俊雄／永嶋正俊 著



オフサイド(エリア・オブ・アクティブ・プレイ)、ゴールキーパーの交代など、1994年の規則改正の最新情報を追加した三訂版。審判員、コーチ、プレイヤーにとっての必携書である。
●四六判・224頁 定価1,236円